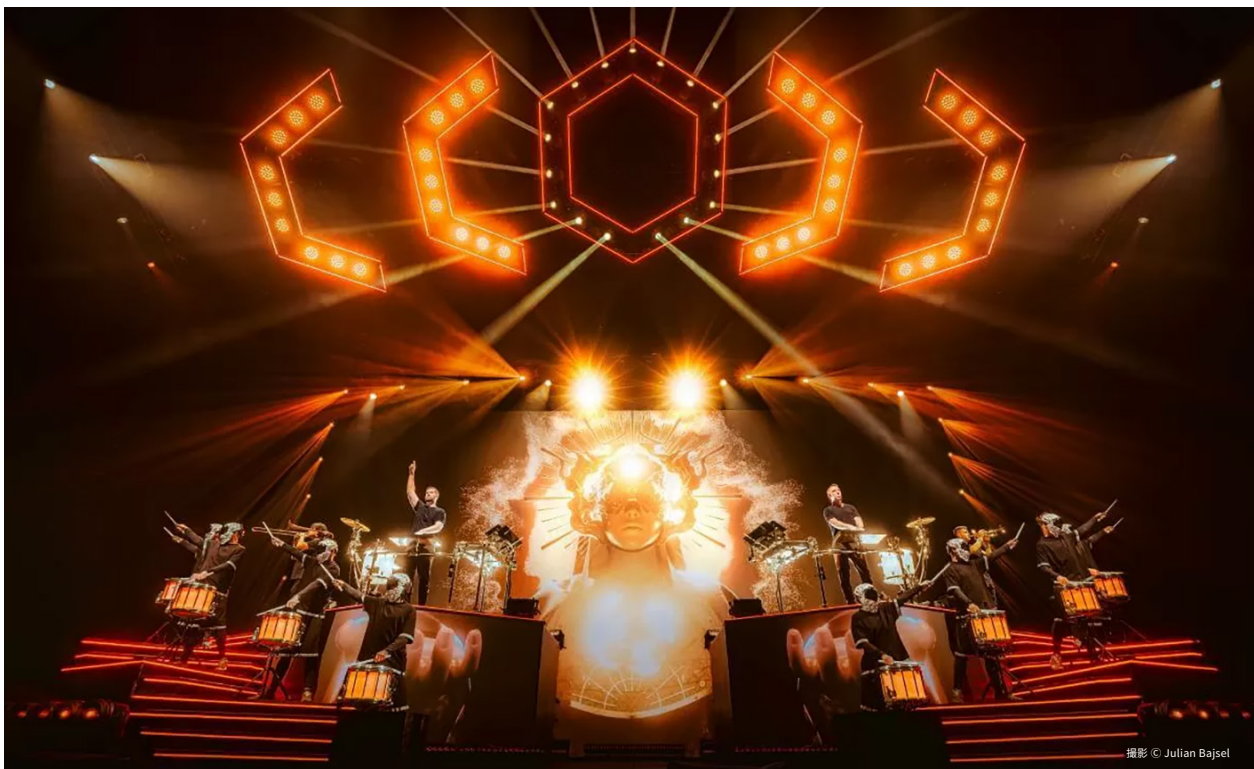




ODESZA が L-Acoustics K1 コンサート用サウンドシステムにスケールアップ



撮影 © Julian Bajsel

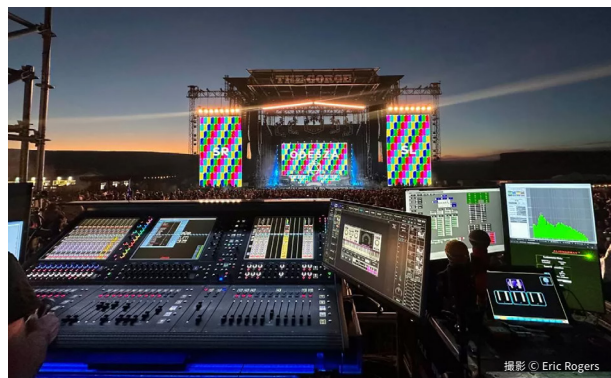
2024年7月

「こんなショーは誰も見たことがないと思います。」これは、Clearwing Productionsのコンサートサウンドシステムエンジニアであるエリック・ロジャーズ (Eric Rogers) 氏が、2022年の開始以来観客を魅了してきた ODESZA のアイコン的ツアー『The Last Goodbye Tour』への感動的な別れとなる『The Last Goodbye Finale Tour』について語った言葉です。6月と7月には、ニューヨークのマディソンスクエアガーデン、ロサンゼルス、ボルダーのフォルサムフィールドなどの伝説的な会場で最後の公演を行い、故郷ワシントン州の Gorge Amphitheatre で、一連のショーのクライマックスを迎えました。これらのショーは、2022年にリリースされ、グラミー賞最優秀エレクトロニックアルバム賞にノミネートされ、高い評価を得たアルバム『The Last Goodbye』を含む、グループの最も革新的な音楽の歴史を祝うものでした。ODESZA のファンとエレクトロニックミュージックのツアー双方にとって、歴史的意義のあるライブになることは間違いありません。

これらのショーは、普段からシンセサイザーのバンクやその他の MIDI 制御コンポーネントを駆使してパフォーマンスを行う ODESZA を構成するデュオ、ハリソン・ミルズ (Harrison Mills) とクレイトン・ナイト (Clayton Knight) にとって初のスタジアム公演でした。「今回の公演は、トランペット、トロンボーン、ギター、6人編成のストリング・セクション、8人編成のドラム・ラインなど、時には19人のミュージシャンが一度にステージに登場したことも、他のショーとは違っていました。」と、2017年の『A Moment Apart Tour』から ODESZA に参加しているロジャーズ氏は話します。「ステージには小さな軍隊がいました。幸運なことに、Motion Music の制作マネージャーであるシェーン・クロール (Shane Crowl) 氏と早い段階で話をするのができ、彼はこのツアーのすべての席で、前から後ろまで、最初の音から最後の音まで一貫した音質とヴォーカルの明瞭さで素晴らしい体験をしてもらいたと思っていました。基本的に彼が『それを実現するシステムを設計してくれれば、必要なものは何でも用意する』と言ってくれたのを聞いて、とても嬉しかったです。」



撮影 © Eric Rogers



撮影 © Eric Rogers





撮影 © Eric Rogers

最終的デザインは、合計 256 台のエンクロージャーを活用した L-Acoustics K シリーズによるコンサート用サウンドシステムで構成されました。左右に 16 台の K1 と 4 台の K2 のアレイが、それぞれが 16 台の K1-SB 低域拡張ハングの前にフライングされ、その両側にアウトフィルとして 16 台の K1 と 4 台の K2 のハングが隣接して配置されました。会場によっては、代わりに 8 台の K1 と 6 台の K2 の上に 4 台の K1-SB が配置される構成になることもありました。ステージ上のモニターは、各ライザーの下に KS28 が 1 台、Kara II が 6 台、SB18 が 5 台、X8 が 2 台、そして 26 チャンネルの Wisycom IEM で構成されていました。

エレクトロニックミュージックのショーには強力な低音が必要ですが、ステージの前面に 48 台のカーディオイド構成の KS28 サブウーハーを並べ、3 台ずつエンドスタックし、フロントフィルとして中央の 8 つのサブグループに 1 台の A15 Focus エンクロージャーを乗せて配置することでそれを実現しました。「その結果、前方へのロスを最小限に抑えながら、後方への最も効率的なリジエクションを実現することができました。」とロジャーズ氏は説明します。「サブアレイの最後の 2 つのスタックは、より多くの LF エネルギーをスタンドにシフトするために、45 度のエンドファイアに配置しました。」このシステムのインフラは AVB で接続されており、ロジャーズ氏によるとこれが最高の冗長性オプションを提供したとのこと。4 台の Clearwing カスタムステージラックに振り分けられた合計 96 台の LA12X アンプリファイドコントローラーが大規模なシステムを駆動し、3 台の L-Acoustics P1 Milan-AVB プロセッサーを使用して管理されました。

システムのスケールの大きさを際立たせているのは、クルー全員が自分の IEM を持ち、部門リーダーがワイヤレス・マイクを持っているという事実です。そのすべてが DiGiCo SD10-RE ラックマウントコンソールを介して設計・管理されたインカムシステムに乗っています。3 台の DiGiCo Quantum と SD-Range FOH およびモニターコンソール、3 台の SD-Rack、そして 1 台の MiNi-Rack のうちの 1 台が 124 入力の複雑なプロダクションを管理するために使用されました。



撮影 © Julian Bajsel

「妥協のないコンサート用サウンドシステムを設計したのはこれが初めてでした。」とロジャーズ氏は感嘆します。「それを実現するには、K1 が当然の選択でした。」課題は、新しいバンド・ラインナップの幅広いダイナミック・レンジ内で、最前列から最後まで一貫して持続的なインパクトを生み出すことだったと彼は語ります。「典型的な EDM ショーのように、常に 102 ~ 103 dB が目の前に迫ってくるわけではありませんでした。」と彼は言います。「94 dB くらいのソフトな瞬間もありましたが、それは最前列と同じように 130m 離れた上層階でもインパクトが感じられる必要がありました。K1 と K2 のパワーと明瞭さにより、すべての音量レベルで、会場のすべての座席に優れたサウンドと体験を提供できます。」

FOH エンジニアのジョー・スピッツァー (Joe Spitzer) 氏は、エレクトロニックツアーでは、サウンドシステムが音楽に見合うだけのパワーを発揮することがしばしばあると言います。「システムを限界近くまで押し上げなければならないことが多く、時にはシステムの能力以上のパワーを要求することもあります。K1 では、その逆の効果、つまり十分なパワーが得られました。私たちの課題は、それをできるだけ効率的に活用することでした。BMO での最初のギグでサウンドチェック中に、どれだけのパワーがあるかがわかりました。残りの時間は微調整に費やしました。素晴らしい経験でした。」

スピッツァー氏は、コンサート用サウンドシステムは、プラスからパフォーマンスをサポートする 12 個のステレオ・トラックまで、電子音とアコースティック音源を組み合わせるニュアンスと感度によく反応したと語っています。「K1 の透明性はすぐに明らかで、ショーのライブ要素が本当に際立ちました。このようなショーにこれ以上のシステムは考えられません。アーティストが音楽に必要なものと、私たちがコントロールに必要なものの両方を提供してくれました。それは、L-Acoustics がトータル・ソリューション、つまり市場で最高の大型ボックスと最高のソフトウェアだからです。それは常に最高の組み合わせです。」